

岐阜県関市板取地域におけるアジサイロードの再生

1. はじめに

岐阜県関市板取地域の国道 256 号線・県道 52 号線はアジサイロードと呼ばれ、沿道に 24km に及ぶ区間に約 10 万本のアジサイが植栽されている。梅雨時期にはあじさい祭りが開催されるなど地域にとっては重要な観光資源の一つとなっている。

2. 研究目的

本研究では年々衰退傾向にあるというアジサイロードを再生させ、板取の地域活性化につながる有効な観光資源として機能することを目的とした。そのために必要と考えられる施策として、「アジサイの現状把握」、「管理方法の統一化」、「管理スキームの構築」の3つをアジサイロード再生の軸としてそれぞれ検討を行った。

3. 研究内容

3.1 アジサイロードの健全度評価

アジサイを健全な状態で持続的に管理するためには現状を把握することが必要である。そのために、砂防関係施設(砂防ダムなど)の日常点検で用いられている健全度評価の考え方を取り入れ、アジサイに対する健全度評価判定基準とその結果の取り扱いについて検討を行った。

健全度評価の調査項目は「都市公園の樹木の点検・診断に関する指針(案)」、「街路樹の倒伏対策の手引き」における調査項目を参考に決定した。この評価項目は専門知識が不要で、費用は最小限かつ簡易的に実施できる指標とするよう留意した。以上の条件で設定した調査項目は、①樹勢、②葉の生育状況、③枝の生育状況、④枯損している割合、⑤病虫害の被害の5つとした。これらの調査項目を返上レベルとしてそれぞれ5段階(a~e)で評価し、その最も低い評価を総合健全度評価として判定する。評価結果は、A(健全)、B(概ね異常なし)、C(要経過観察)、D(枯死の危険性あり)、E(枯死)の5段階とし、それぞれの結果に対する必要な措置等の目安を設定した。そして以上の検討内容をもとにアジサイを点検するための「アジサイ診断カルテ(案)」を作成した。アジサイロードのアジサイの管理はこれらの結果をもとに管理計画を立て、評価結果の低いアジサイの多い箇所から必要な対策を行なっていくものとする。

3.2 アジサイ管理マニュアル(案)の作成

現状分析によって、アジサイロードは箇所ごとに(もしくは事業者ごとに)剪定等の方法がバラ

表-1 総合健全度評価判定基準及びその措置

判定	判定基準	措置等の目安
A 健全	調査項目のすべてが「a」である	必要な措置等を講じる必要なし
B 概ね異常なし	調査項目のいずれかに「b」がある	必要に応じ経過観察 通常通りの管理を行う
C 要経過観察	調査項目のいずれかに「c」がある	必要な措置等を講じ経過観察 回復の見込みあり
D 枯死の危険性有り	調査項目のいずれかに「d」がある	必要な措置等を講じ経過観察 撤去・更新を検討する
E 枯死	調査項目のいずれかに「e」がある	撤去する 環境次第で他の樹木への更新も検討

図-1 作成したアジサイ診断カルテ(案)

それぞれの結果に対する必要な措置等の目安を設定した。そして以上の検討内容をもとにアジサイを点検するための「アジサイ診断カルテ(案)」を作成した。アジサイロードのアジサイの管理はこれらの結果をもとに管理計画を立て、評価結果の低いアジサイの多い箇所から必要な対策を行なっていくものとする。

バラで統一されていないということが分かった。そこで、既往研究で作成されたアジサイ管理マニュアルを再編し、アジサイロードを管理している事業者に向けて、「アジサイ管理マニュアル(案)」を作成した。内容は剪定と施肥についてである。剪定は花芽分化の時期までに行う花後の剪定と、株全体の樹形について整枝する休眠期の剪定の方法について記載した。施肥については、花が咲いた後に行うお礼肥と春からの生育に備えるための寒肥について記載した。

また地元住民がボランティア活動の際や自宅で生育する際に役立つよう、一般向けに「あじさいの管理方法」と題したアジサイ管理マニュアル(案)を作成した。これは、アジサイに関する知識を地元住民に学んでもらい、よりアジサイロードに愛着を持ってもらうことが目的である。

3.3 アジサイロード管理スキーム(案)の構築

アジサイロードは現状として関市が主体となって管理を行なっている。しかし、アジサイロードが観光客や地元住民から愛される魅力ある観光資源として機能するためには、行政以外の協力が必要であると考えられる。そこで、板取地域全体でアジサイ管理に関わっていただけるようなスキームを構築し、過疎化や生きがい喪失などの地域課題解決を目指した。

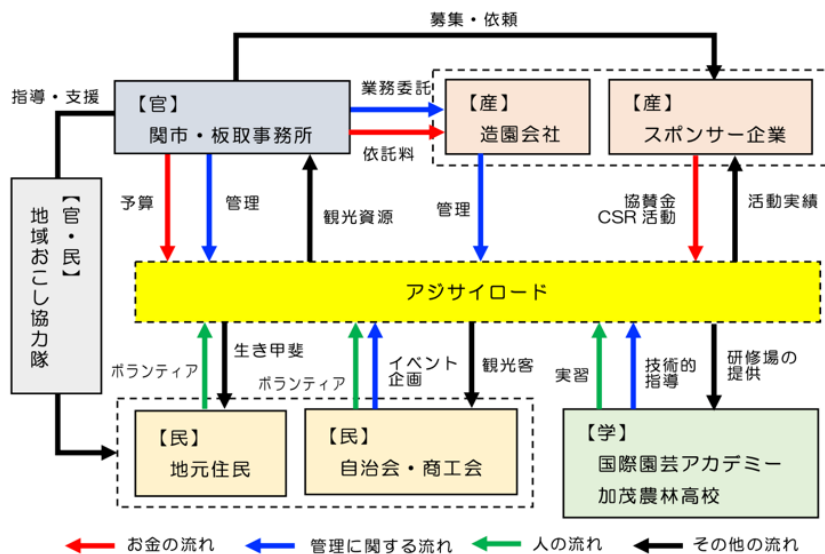


図-2 アジサイロードの管理構造

管理スキームは、他観光地における取り組み事例を参考に板取地域の特性も踏まえながら検討した。その結果、アジサイロードの管理は産学官民が一体となり予算、管理、人材、技術の役割を分担しアジサイロードの運営を担っていくことが適切であると判断した。「官」である関市はハード面の整備や管理、予算面でのバックアップをする。「民」の住民、自治会などは、ボランティアやイベントの企画などに参加し生きがいを得る。「官」と「民」を繋ぐ橋渡し役は地域おこし協力隊が担い、住民の細かな要望などを行政と調整する。「産」はアジサイロードを実際に管理している地元造園会社や、アジサイロードのスポンサーとなる企業である。スポンサー企業は名古屋市のスポンサー花壇のように、管理運営のスポンサーとして協賛金を出資してもらい、管理費用として生かすものである。「学」は当校や、岐阜県立加茂農林高等学校の生徒がボランティア活動に参加したり、特別講義の実習場所をアジサイロードが提供することで、より実務に近い授業を行うことができる。

以上のように、地元の組織が一体となって運営できるような管理スキームを構築した。将来的には、他観光地のように地域おこし協力隊が中心となって行政主体から住民主体の管理・運営が可能になると良いと考える。

4. まとめ

本研究では前述した3つの軸について検討を行い、それぞれ指針やマニュアル等の仕組みを作成した。今後はこれらの実用性について継続的に調査研究が必要であると考えられる。